

## 自分の苦しみも忘れる？新型コロナ後遺症で認知症リスク急増の恐れ

2023年1月15日 毎日新聞

国内で初めて新型コロナの患者が確認されてから15日で3年が経過した。パンデミック（世界的大流行）を経て、社会はどう正常化していくのか。各分野の現状を連載しながら、ウィズコロナ時代を展望する。

コロナに感染すれば誰しもうる後遺症では、記憶や認知の機能が衰えることが明らかになりつつある。治療法は確立しておらず、昨年秋には米国の研究チームが、感染すると認知症の一つであるアルツハイマー病を1年後に発症するリスクが高まるとの結果をまとめ、関係者に衝撃を与えた。

60歳を迎えたこの男性は兵庫県内に住み、会社員として働く。スマートフォンのメモ帳に、「朝起きて布団の上にも座ってられない」「倦怠感で何もやることが出来ない」など日々の困りごとを打ち込むのが日課だ。男性が通院する医学研究所北野病院（大阪市）の丸毛聡医師に症状を伝えるのにメモは欠かせない。

「以前は記憶から順序立てて説明することは何の苦もなくできた。集中して考える力も落ちていて、メモがあっても文字を追うのが難しい時がある」。男性は苦しい胸の内を吐露する。こうした症状を自覚し始めたのは昨年9月ごろ。仕事から帰宅して家族だんらんの時間でも、その「苦しみ」から逃れることはできない。台所に行っても何をしに来たか忘れてしまうことがある。探し物も以前より増えたように感じる。何に対しても関心が湧かなくなり、「家族からの相談事を受けるのもおっくうになった」とこぼす。

### 代表的な後遺症の症状

※「新型コロナウイルス感染症 診療の手引き 罹患(りかん)後症状のマネジメント」より引用



#### 全身症状

- 倦怠(けんたい)感
- 関節痛
- 筋肉痛

#### 呼吸器症状

- せき
- たん
- 息切れ
- 胸痛

#### 精神・神経症状

- 記憶障害
- 集中力低下
- 不眠
- 頭痛
- 抑うつ

#### その他

- 嗅覚障害
- 味覚障害
- だるさ
- 下痢
- 腹痛

新型コロナに感染したのは昨年7月下旬のこと。38・6度まで熱は上がったものの、数日で回復する軽症だった。ワクチンは3回接種しており、他の感染者と比べて変わった症状はないはずだった。

発症から10日が過ぎた頃から「異変」が起きた。せきが止まらず、強い倦怠感にさいなまれ、仕事に戻れなかった。8月下旬から在宅勤務で復帰したが、頭痛などで「ほとんど仕事にならなかった」と振り返る。そんな時期に記憶障害のような症状も表れ始めた。

### 長期的な神経障害のリスク

後遺症診療に取り組む丸毛医師は「感染に伴う脳の炎症が続いていて、思考や記憶に影響が出ている可能性が考えられる」と説明する。

味覚や嗅覚障害に加え、記憶障害なども後遺症の症状として知られているが、米国では脳に関わる後遺症として驚くべき研究結果が明らかになった。

それは米ワシントン大公衆衛生研究所などのチームが昨年9月に医学誌ネイチャー・メ

ディシンで発表した1本の論文だ。退役軍人の全国医療データベースから、新型コロナ患者15万4068人（平均61・4歳）と、感染していない563万8795人（同63・4歳）のデータを主に解析した。

すると、コロナ患者は感染から1年後に記憶と認知機能に障害が出るリスクは、感染していない人に比べて1・77倍上昇。40～50代では特に高い傾向にあった。さらに、認知症の一つであるアルツハイマー病を発症するリスクは2・03倍に上昇するというのだ。

チームは「調査は、白人男性が多いという制約があるが、新型コロナに感染した人には、長期的な神経障害のリスクがあるということが示された」と結論付けている。

男性が9月から通う北野病院は、神経障害も含め後遺症治療を手がける国内でも数少ない医療機関の一つだ。

世界保健機関（WHO）は後遺症について「発症から3カ月後に、2カ月以上続く症状があって、他の原因がない場合」と定義する。昨年12月に大阪大と大阪府豊中市などが公表したデータによると、昨年3月末までに新型コロナに感染した3247人の回答を分析したところ、47・7%が後遺症の症状を経験し、このうち1・6%が日常生活に支障を感じていた。

後遺症は、鼻から喉の間にある上咽頭（いんとう）に起きる慢性的な炎症が一因となっている可能性がある。この炎症を抑えるため、男性は鼻から入った空気が最初に当たる部分に薬剤を塗る治療に取り組む。さらに抗炎症作用のある亜鉛やビタミン補給のための薬が処方されている。紹介された耳鼻科でこの治療方法を続ける男性は「倦怠感やどうきなど、体の状態がぐっとよくなった」と明かす。週に何度かは出社が可能になった。

しかし、記憶力や思考力は改善していないという。男性は「ぼーっとしてしまいうことが増え、会議などで話していても、何を言っているのか分からなくなってしまうことがある」



と漏らす。

さらに「コロナ感染前を 100 点とすると、身体的には 55 点まで戻った。しかし、頭の状態は 35 点ほどで、元のように戻るのか一番の心配事です」と不安な表情をのぞかせる。どのような仕組みで脳への影響が表れるのか。複数の学術論文と、岐阜大の下畑享良教授（脳神経内科学）によると、新型コロナの感染によって、炎症を誘発するサイトカインという物質やウイルス自体が脳内に入り込み、脳神経を傷つけることで発症する可能性が指摘されている。

死亡した感染者の解剖結果からは、血管内にある不必要な物質や病原体が脳に入るのを防ぐ血液脳関門が破壊されたケースも報告されている。高齢のサルを使った実験では、鼻腔（びくう）を通じて脳内にウイルスが入り込むことが確認されている。この結果、アルツハイマー病患者の脳内と同様の炎症が起きるとみられる。

実際に、ノルウェーのチームが米医学誌ネイチャー・メディシンで発表した成果によると、コロナに感染して自宅療養をした 247 人のうち、半年後に記憶障害の症状が出たのは 18%。年代別では 60 歳以上が 24%と最も多く、46～60 歳は 22%▽31～45 歳が 16%▽16～30 歳は 11%——と続いた。

脳に影響を与える症状について確固たる治療法は確立されていない。下畑教授は「新型コロナ感染は若年者であっても記憶障害をもたらし、高齢者においては認知症を発症するリスクになるということを認識する必要がある。仮に認知症患者が急増するようなことがあれば、社会への影響は大きくなる」と危機感をあらわにする。【渡辺諒】